

医薬品は大きく分けて、注射薬、内服薬、外用薬に分けられます。注射薬は注射針を体に刺すことで投与されるもの、内服薬は服用(飲み込むこと)し消化器管を経て作用するもの、外用薬は皮膚に浸透して作用するものになりますが、この外用薬には塗り薬以外に点眼薬、点鼻薬、貼り薬などがあり、他には一度は口に入れても吐き出すうがい薬や、なめることが目的のトローチ剤なども含まれます。

今回は外用薬の中の塗り薬についてお話ししたいと思います。塗り薬は同じ主成分でも、軟膏タイプ、クリームタイプ、ローションタイプ(液状)に分けられていることも多く、患部の状態や患者の使い勝手(使用感など)を考慮してDrが剤形を選択されています。ただ、ここまではDrが最適な薬剤を考え処方してくれるのですが、その塗り方まではなかなか指導、説明しきれていないようです。塗り方には単純塗布(塗り広げる)、単純塗擦(擦り込む)、貼付(布に延ばした薬を貼る)という方法がありますが、皮膚への浸透率は塗擦するのが最も良く、塗布、貼付の順で悪くなります。塗り薬は擦り込めば擦り込むほど効果が強くなると言えるのですが、症状によっては擦り込むことが逆に患部を悪化させることがあります。実は炎症部を強く刺激すると、細胞内にある炎症を引き起こす物質(ヒスタミンなど)が拡がりやすくなり、それによって患部が酷く広がってしまうことがあります。したがって症状によって塗り方を変えなければなりません。



- ①塗擦・・・痒みのないカサつき、角化、
慢性的な腫れのない痛み
- ②塗布・・・痒み、紅斑、湿疹
- ③貼付・・・保護、補助(先に塗った薬の効果を高める)

上記が一般的な症状に対する塗り方なので、病院で塗り方の指導を受けられなかったり、塗り方が分からない場合は薬剤師に相談されると、より効果的な治療になっていくと思います。

